ニッポン 人・脈・記　進め ひょうたん島 12

町の宝の君らを乗せて

「一年を振り返って、ひとことで表現すると――」

昨年末、県立大槌高校の終業式。壇上の校長高橋和夫(57)は言葉に詰まった。

「お前たちは本当に、いい生徒たちだよなっ」

震災後、大槌の町外れの高台にあった一つの高校に、千人の被災者が押し寄せた。病院が、中学校が、幼稚園が移ってきた。避難者が自治会を組織するまでの40日間、先生たちが避難所を運営した。

盛岡に自宅がある高橋は校長宅に泊まり込んだ。それぞれが考え、必要だと思うことをやるしかなかった。

生徒は、卒業式をすでに終えた5人と、下校していた1人が犠牲になった。37人が家族を失うなど、300人の3分の2が被災した。避難所が高校という生徒は、多い時で37人いた。避難者名簿作り、食事の用意、物資の運搬、仕分けに率先して参加した。後に町長になった碇川豊(60)は「町の宝だ」と称賛した。

笑顔を絶やさない2年生の小林瑞季(17)は、8月まで学校の体育館で家族と過ごした。遠くから支援に来てくれる人たちと話すうち、「支えられるばかりでなく、支える側になりたい」と思った。「小さな子の遊び相手ならできるかも」。同級生を誘い、支援者と同道場に小さな「プレールーム」を造った。

主将を務めるバスケットボール部の部員も加わり仲間は10人になった。避難所生活が終わっても、一緒に遊んだ子どものつながりは続き、クリスマスパーティーも開いた。

高橋は、生徒の教育環境を第一に考えた。

自衛隊が運動場への駐留の延長を申し入れてきた時、高橋は思わず「生徒の夢をつぶしますよ」と声を荒らげた。

大会に向けて毎日遅くまで練習していた野球部やサッカー部を思ってのことだった。

生徒は「町の復旧に尽くしているのだから」と文句を言わず、6月の自衛隊撤退時には、感謝の色紙や手紙を送った。「私が大人げなかった」と高橋は反省した。

水くみや物資の仕分けなど力仕事のリーダー格だった3年生の澤田瑛(18)は震災前、大学に行くために町を出たらもう戻るまいと思っていた。

「いつも同じ店で買い物をするのがつまらなくて」

大学では経済を学ぶつもりだった。しかし、震災で町がなくなり、避難所で大人たちとつきあううち、「世の中カネばかりじゃない」と思うようになった。

みんな身内を失っているのに、「大丈夫か」と声をかけてくれる。授業再開が決まったとき、「子どもたちの邪魔はできない」と、静かにほかの避難所に移ってくれた。

「町づくりの勉強をして、復興に参加したい」。志望を変えて推薦入学が決まった。

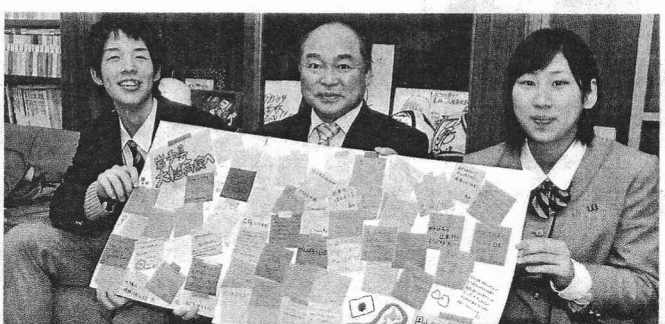
町づくりの基本像を話し合う地域復興協議会にも、大人に交じって参加した。人の考えを聞くためだったが、「防潮林が必要だ」と提案し、コーディネーターの東京大教授中井祐(44)をうならせた。

就職組は全員が内定した。受験組は最後の追い込みのさなかだ。震災で家族が無事でも、家庭内に深刻な問題を抱えた生徒もいる。「みんな、我慢し過ぎるくらい我慢している」。そう思うと、高橋の涙腺はまた緩む。

復興に向け、生徒はスローガンを考えた。「笑顔」「感謝」、そして「前進」。

震災後、大槌で暮らす私には、この高校生たちが「ひょうたん島」で困難を乗り越えていく子どもたちと重なる。きっと彼らはくじけない。進め！　大槌。

このシリーズは文を東野真和、写真を八重樫信之が担当しました。文中の敬称は略しました



左から、澤田瑛さん、高橋和夫さん、小林瑞季さん

■次回から「つむぐ　織る」です。人をめぐる物語をお寄せください。電子メールはjinmyaku@asahi.comへ。

朝日新聞　平成24年1月24日掲載